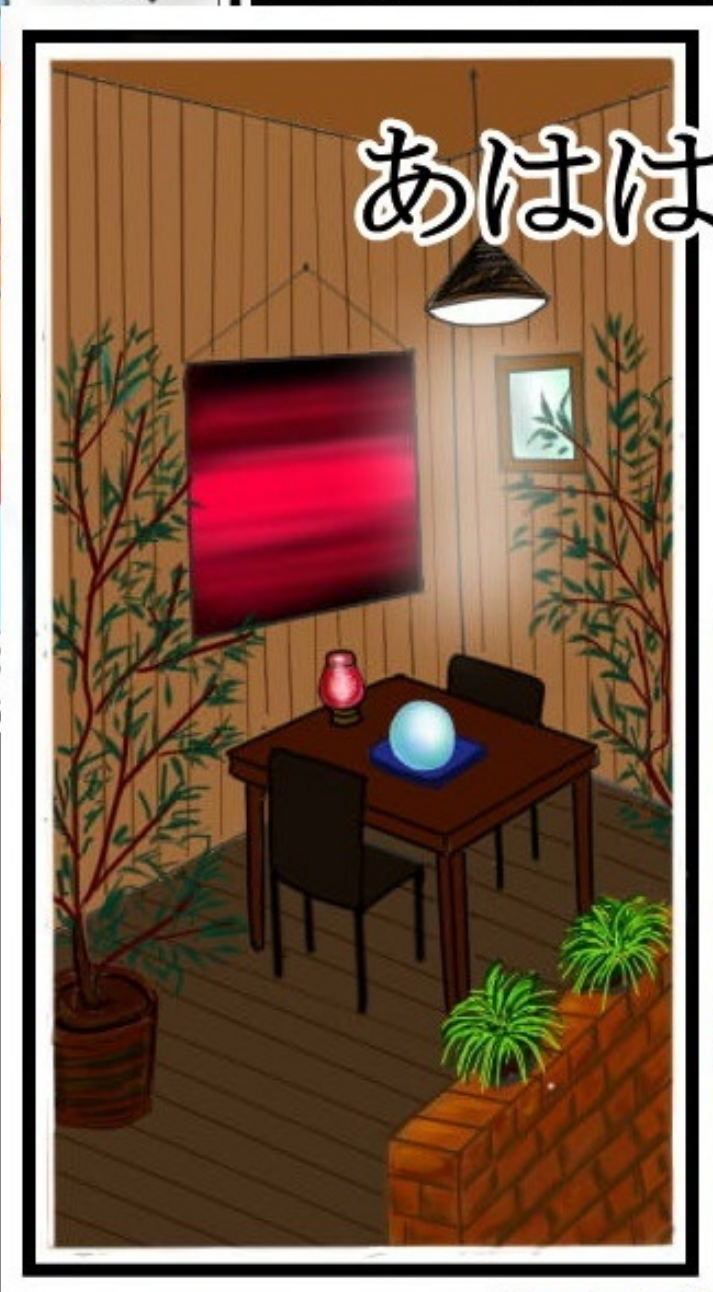


占いカフェの

片隅で

あはは☆るい



#1

月曜の朝は憂うつ

占いカフェの片隅で 【月曜の朝は憂うつ】

月曜の朝って、どうして憂うつなんだろう？
ドアに鍵をかけながら、浅井真美はため息をついた。
駅へ向かう足が重い。

人、人、人。

人を見ていると息苦しくなってくる。

電車を待つ間、
真美は小坂友里のことを考えることにした。

友里は大学時代の友人で、
親友って呼べるほどではないけど、
遠慮なく物が言える仲だ。

ちょうど1年前の夏。
10年務めた会社を辞めた友里は言った。

「私、カフェをやろうと思うの」

お1人様でもくつろげるカフェを作りたい、
というのが友里の夢だった。

OL時代にせっせと貯めた貯金をはたいて、
足りない分は、親から借りると言う。

「オープンしたら絶対行くよ。
何か私でも力になれることがあったら言ってね！頑張ってね！」

真美はそれほど深く考えもせず、軽いノリで友里を励ました。
あれから1年が経ち、本当に友里は夢を叶えた。

真美は深いため息をついた。

「それにくらべて私ときたら・・・」

月曜の朝は、ネガティブな考えばかりが浮かぶ。

今週もまた、真美の憂うつな5日間が始まった。月・火・水・木・金。

月曜の昼休み

月曜の夕方、真美は友里のカフェへ寄ることにした。
まだオープンはしていないが、様子見がてら、
お祝いだけ先に渡しておこうと思ったのだ。

会社の昼休みに電話すると、
友里はまるで真美からの電話を待っていたかのように、
すぐに電話に出た。

「あれ？真美？どうした？会社、クビになった？」

「ちょっとお、縁起でもないこと言わないでよ。私で悪かったわね」

「ごめん。業者からの電話を待ってたものだから」

「そうなんだ。こっちこそ忙しい時にごめんね。
友里、今日の夕方、お店にいる？」

「いるよ。ぜひ寄って。内装もだいたい出来たから」

「へ～。楽しみ。6時半ごろには行けると思う」

「分かった。待ってるから。
私も真美にちょっと頼みたいことがあってさ。
電話かけようかなって思ってたところ」

「頼みたいこと？」

「そうなの。真美にしかお願いできないこと」

友里が猫なで声を出す時は要注意だ。

「あ、ごめん！詳しい話はお店に来てくれたときにね。じゃ」

「もしもし？友里？もしもし？」電話は切れていた。

いつものことだけど、友里はせわしない。

月曜の夕方

憂うつな月曜日も、夕方になると、
真美の足取りは少しだけ軽くなる。

真美の会社から、歩いて20分ほどのところに
友里のカフェはあった。

シックな色合いのドアを開けると、
食器を棚に並べていた友里が振り返った。

「あ、真美！待ってたよ。
どう？カフェらしくなってきたでしょ？」

店内は、おひとり様を意識した席が壁側に並び、
カウンター前の席は4つ。

まだテーブルと椅子がセッティングされてない空間もあった。
それほど広くもなく、狭くもない。

隣の席の人が気にならないよう、
観葉植物や、オシャレな本棚などが配置してあり、
ゆっくり落ち着ける気配りがなされていた。

「もうすぐオープンだね。いいなあ、友里は。
私もこんなカフェで働けたら楽しいだろうなあ。
ところで何？頼みて？」

「あのさ、突然こんなこと頼むのも申し訳ないんだけど」
いつになく真剣な表情の友里に、
真美は何だかドキドキした。

「やめてよ。そんなに真剣に見つめられると、怖いよ」

友里の大きな瞳が、一段と大きく輝いた。

夕方の憂うつ

「真美、できたら手伝ってくれない？」

「何を？」

「だから、カフェを手伝ってくれないかなと思って。
無理に、とは言わないけど、
真美、会社辞めたいって言ってたでしょ？」

「う、うん、それはいつも言ってるけど...」

「でしょ？それなら会社なんかさっさと辞めて、
私のカフェ、手伝ってよ。
お給料はいくら出せるか、まだ分からないけど、
私も頑張るつもりだから」

「でも、この前 電話した時、
お店を手伝ってくれる人も見つかったって、
言ってなかった？」

「それがね、来てくれるはずだった人が
急に来れなくなってさ。
どうしよう、オープンの日も近いのと思って。
そしたら真美の顔がパッと浮かんだの」

確かに真美は、友里と会うたびに、
「あんな会社辞めたい」と愚痴っていた。
でも、本当に会社を辞める気などなかった。

そんなことは友里も分かっていた。
分かっているけど、カフェを手伝ってと頼める人は、
真美以外に思いつかなかった。

友里の話を最後まで聞いてしまうと断りにくい。
そう思った真美は、腕時計を見て「あ、もうこんな時間」と言った。
今夜は何の予定も入っていないのに。

努めて明るい表情を作り、真美は言った。

「オープンの日って、日曜日だね？
いいよ、オープンの日はお手伝いするから安心して」

無理なお願い

「あのね、オープンの日だけじゃなくて、
ずーっと来て欲しいってお願いしてるわけ」

真美も友里が言いたいことは分かっていた。
でも、会社を辞めてまで手伝うというのは無茶な話だった。

「言っとくけど、私、料理、苦手だよ。
カフェで働いた経験もないから、
お客様にどう接していいのかわからないし」

「料理は作らなくてもいいよ。私がやるから。
真美ならできる。絶対できるって。
ね、お願い！お願いします！」

友里は手を頭の上で合わせて、「お願いします！」と言いつけた。

カイシャ、ヤメル、ヤメテ、カフェ？
ヤメル、カイシャ、カイシャ、ヤメテ、カフェ？

真美は頭がくらくらした。

でも、すぐに断らなかったのは、心のどこかで、
転職したいという気持ちがあったからかもしれない。

「私に頼まなくても、友里にはお友達がたくさんいるでしょ？」

「ダメ。他の人じゃダメ。真美じゃないとダメ」

そこまで友里が言う理由が、真美には分からなかった。
悪い気はしなかったけれど。

「しばらく考えさせてくれる？」

「いいよ、て言いたいけど、
できるだけ早く決めて！お願い！
頼りにしてるから、ね？」

友里は子犬みたいにうるうるした目で真美を見つめた。

もう1つのお願い

「それと、頼みついでにもうひとつ」

「え～、まだあるの？」

「真美さ、自己流で占いをよくやってたでしょ？」

「ああ、大学のときね」

「真美の占いは当たるって、評判だったじゃない？」

「あれは皆の性格や行動パターンを知ってたから、自己流で占っても当たってたんだよ」

「もしも、お店を手伝ってくれるなら、やってくれない？その自己流の占いを」

「え—————！？」

「そんなに驚かなくても」

「驚くでしょ？」

「だからね、真美は料理なんてしなくていいの。ウエイトレスと、占い師を」

「あー！！！」

友里の言葉をさえぎって、真美がいきなり叫んだ。

「真美らしくもない。急に大きな声出してどうしたの？」

「友里が私にしか頼めないって言う理由がやっと分かった。占いが目当てなんだ。だから私なんだ」

「意地悪な言い方しないで。私は真美のことが好きだから頼んでるだけ」

「申し訳ないけど、私はお手伝いできないから！」

帰ろうとする真美の腕を、友里が必死でつかんだ。

カフェの片隅

「あそこ、見て」

友里が指差した店の隅には、
明らかに他のテーブルや椅子とは違う、
不思議な風合いのある椅子と小さなテーブルが、
ビニールがかかったまま置いてあった。

「急に来られなくなった人っていうのがね、元占い師でさ」

「占い師？元？」

「そう、元占い師。
なんかの館？みたいな名前のお店で、
占い師として活躍していたそうよ。
でも、人気が出ると、他の占い師からお客を取ったとか言われて、
嫌になって辞めちゃったんだって」

「どうして友里はその人のこと、知ってるの？」

「私さ、このカフェを開くために、
何件かのカフェでバイトしたこと、真美も知ってるでしょ？
その元占い師さんは、バイト先の常連さんだったの。
ちょうど私も、そろそろカフェを開く準備に入ろうと思っていた時で、
頼んでみたの。私のカフェを手伝ってくれないか？って。
良かったら、私のお店で占いもやってみませんか？って。
そしたらすぐにOKしてくれた」

友里は無計画なように見えて、意外と計画的なところがあった。
OLを辞めた友里は、コーヒーが美味しい店、店員の感じが良い店、
お1人様で入っても居心地が良い店を自分なりに調査した。

そして、これは！と思った店にバイトで雇ってもらって、
友里の言葉を借りると「修行してきた」と言っていた。

占いカフェ？

「もしかして、友里がやろうとしているのは、
占いカフェ、みたいな？
ダメダメダメ。私はダメ。素人だから」

「分かってる」

「分かってるのに、どーして？」

「いいの、それでもいいの！」
友里は真美の言葉をさえぎってキッパリと言った。

「お遊びの占いでもいいの。
無料ってことにすれば、誰も文句は言わないでしょ？」

あまりにも強引な友里に、真美はムツとして言葉が出なかった。

「ほら、なんていうの、
友達の家遊びに行くみたいに、気軽にお店に寄ってもらって、
静かに過ごしたい人はそれでいいし、
誰かに話を聞いてもらいたい人は、
占いコーナーで心をオープンにしよう。
そういうカフェに私はしたいの」

「占いなんかやらなくても、美味しいコーヒーと、
安らげる雰囲気があれば、楽しく過ごせるでしょ？」

「もちろん、美味しいコーヒーは用意する。
お客様が興味ありそうな雑誌も用意する。
お1人様で来店されても、楽しく過ごせる準備はするつもり」

「それでいいじゃない？」

「ダメよ。お1人様のお客様が、もしも誰かと話をしたくなったら？
心の中がもやもやしてたら？悩み事を誰かに相談したくなったら？
真美ならどうする？」

友里の熱弁

お1人様でカフェへ行って、
悩み事を話したくなる人っているだろうか？

真美は友里が目指しているカフェがよく分からなかった。

「話したいお客様はカウンター席に座って、
友里と話せばいいでしょ？」

「それだけじゃダメ。
私はもっとお客様に心をオープンにしてもらいたいの」

「カフェでそこまでする必要はある？」

「必要はないかもしれない。
でもね、カフェでくつろぎながら、友達とか、親とかじゃなくて、
時にはぜんぜん知らない人に、自分の話を聞いてもらおうと、
人は心が癒されると私は思う」

「それと占いと、どう結びつくわけ？」

「占いへ行くと、友達とか親に話せないことでも、
ぜんぜん平気で相談したりするでしょ？
恋愛のこととかね。
心の中のもやもやした気持ちを、
占ってもらおうという前提なら、知らない人にも話せる。
占いという前提なら、というところが重要よ、分かる？」

友里は熱弁をふるった。
こんな友里を真美は初めて見たような気がした。

「私は占いを完全に信じているわけではないの。
占いが当たるか、ハズレるかということより、
人に悩み事を話して心が癒されることが重要だと思う。
人に話すことによって、自分の心の中も整理できるのよ。
そうでしょ？ そう思わない？」

真美の苦悩

友里の話をしているうち、不思議なことに、
真美はカフェを手伝うのもいいかもしれない、と思い始めていた。

友里は占いにこだわっているが、
これだけの情熱があれば、占いなんてやらなくても、
このカフェは居心地のいい空間になるはずだ、と真美は思った。

飲み物が美味しくて、新しい雑誌が取り揃えてあって、
お1人様の席もゆったりとしていて、
オーナーの友里におもてなしの気持ちがある、となれば、
口コミだけでも、お客は寄ってくるというものだ。

「真美？私の話、聞いてる？」

「私、何と言われようと、占いはやらないから。
占いは私みたいな素人には無理！」

友里はしばらく下を向いて黙っていたが、意を決したように頭を上げた。

「占いはやらなくていい、と言ったら手伝ってくれる？」

「え？」

「私は真美に手伝ってほしいの。初めからそう言ってるでしょ？」

「だけど...」

「急にこんな話をしてごめんね。
昔からせっかちなのは分かっていると思うけど。
また私から電話するわ。いい方向でよろしく！」

友里は真美がOKするのを分かっているかのように、
大きな黒い瞳をキラキラ輝かせた。

占いカフェの片隅で（1）「月曜の朝は憂うつ」終わり （2）へつづく。